

「予防原則」を語る人々の危うさ

今時のはやり言葉や世の中の動きでどうにもなじめない、あるいは抵抗を感じるものがある。

科学的根拠から照らし合わせれば簡単に否定できる意見を強弁する人もいる。そういう人は何を言っても頑として思い込みを捨てようとしてない。また、いわゆる「オーガニックライフ」がオシャレだと思いついて御仁もいる。とりわけ何につけ「これぞ正義」と声高に叫ぶ人々に対しては違和感を禁じ得ない。

曰く、「地球にやさしい」「オーガニック」「ヴィーガン」「エシカル消費」「SDGs」「無添加」等々。あるいは「マイクロプラスチックによる海洋汚染議論」「ラウンドアップ

批判」「遺伝子組み換え批判」「ゲノム編集技術批判」等々。

世界中に跋扈する活動家の存在もあるが、本音の商魂を隠して人々に誤解をまき散らす企業も少なくない。「無添加」であることがあたかも「安全」を保障するものであるかのような表示をする商品宣伝。「毎年150万tのNon-GMトウモロコシを輸入しているのだから国内でそれを生産するこ

とにビジネスチャンスがある」と言っている。Non-GMトウモロコシ生産を勧める僕である。でも、ニーズがあればそれをやればよいと思うだけで、遺伝子組み換えを否定する立場にはない。

テレビや新聞、雑誌で報道される内容も酷いものがある。つい先日、NHKのBS放送で見た地球温暖化にかかわる環境問題を取り上げたものもそうだった。番組の中で、何度も繰り返して「大量の農業や化学肥料の利用」などと語られる。そこに映し出される映像は現在ではなく、今から数十年前の映像ではないかと思われる農業散布の様子だった。また、地球温暖化への対策として紹介されるのはいわゆる再生可能エネルギーのことばかりで、CO₂の発生に削減効果のある原子力発電をいかに安全に利用していくかというテーマは一切語られない。さらに、農業での水不足という問題に対しても、遺伝子組み換え品種で乾燥に強い作物の開発が進んでいることや除草剤耐性の作物とグリフォサート（ラウンドアップ）を組み合わせた栽培が農業の使用量を大幅に減らしていることも語られない。

そして、番組のオチのようにアメリカの小農を救っていると語る「不耕起農法」。その前段にアメリカの農業で土壌が荒廃していると説明され、土壌を耕すことが土壌中の微生物をはじめとする生物相が貧しくなっていくと解説する。

そもそも、農家的には耕起作業に伴うコストを減らすことが第一の目的であるものの、土壌流亡を防ぐためのミニマムティレイジ（最小耕うん）やノンティレイジ（不耕起）の技術が開発され普及していったのはアメリカの農業からだ。さらに、ラウンドアップの開発の背景にはアメリカ中西部での土壌荒廃を防止するという研究課題すらあったのだ。

そして今、「予防原則」という言葉がこうした環境問題を語る人々の口に上がる。要するに「疑わしいものは罰せよ」という議論である。科学的根拠によらずに。

我が国での刑事訴訟法に限らず、「犯罪の証明がないときは判決で無罪の言渡をしなければならぬ」という「疑わしきは罰せず」の原則は世界の常識のはずである。

しかし、科学的根拠によるのではなく、デマやそれに乗せられた人々の感情に左右される「世論」に支配されかねない「予防原則」を重要視する意見は危険である。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。